



左上：リヨンのシルクの歴史を華麗に展開する「織物歴史博物館」は必見。写真は、ポール・デルヴェーの絵をもとに染めたシルク。
左下：「アンリ・ジェルマン」では、シルク張りの椅子のカスタムメイドも受け付けている。

右：「カプティバ」は、フレンチエスニックな感性をシルクでカジュアルに表現するブティック。
中上：「女を女にするドレスがあるの」とスイスから来た顧客。
中下：老舗シルク専門店「アンリ・ジェルマン」の9代目オーナー。

とイブニングドレスの店、「マックス・シャール」本店だ。東京、ニューヨーク、パリに支店があり、つくられるドレスの8割がシルク。

実はオーナー・デザイナーであるシャールさんを初めて見かけたのは、夕食に出かけた小さなブション（リヨンではビストロをそうよぶ）だった。荷風が「シャンパンの徳利」を傾けた時代と、おそらくは少しも変わらず、リヨンには、オレンジ色の灯りあかで夜を照らすこんな店が無数にある。私たちが牛のトリップのトマト煮や、腸詰を食べている傍らのカウンターに彼はいた。熟年の男ばかりがバーカウンターで大笑いしているなかに交じっているシャールさんの姿は、まるで放課後の小学生のようだった。

「きみ、ワインは好きかな？」

後日、アポイントが成立し、店のエレガントなソファに向き合って座ったとたん、シャールさんはそう言って腰を上げた。再び戻ってきたとき、彼の手には、くだんのブションから調達したワインボトルとグラスをのせた盆があった。いたずらっ子の笑顔が弾けた。「なぜパリに住まないのかって？ その必要がないからさ。TGVでパリまで2時間だ。パリにもいろいろ便利なことはあるけど、ここにはいい職人がいて、うまい料理とうまい酒がある。リオンはいい町だろう？」

返事の代わりに、この店で会った、スイス

フチボワンの刺繍
ラル・デュ・カ
トリエ。天然色素
を用いて作業が進

・ジェルマンのア
インテリア用の
ている

・ジェルマンのア
いシルクを用いて
ッション

のたたずまいを残しています。クロワ・ルッス広場
は、手頃な値段の陶磁器の店があります。

さらに進んだイヴリー通りには、ラ・メゾン・デ・
カニューという織物工房があり、見学もできます。スカ
ーフが290～490フラン。ディドロ通りには、ラ・ト
ック・ブランシュという菓子店があり、シェフの帽子
型のプラリネにオレンジ風味のチョコレート・ムース
を詰めたものが有名です。

第3のリヨン、新街区の活気

ローヌ川の向こう岸が、いわば第3のリヨン。プレス
キル地区から望むと、はるか遠くに巨大な鉛筆形のビル、クレディ・リヨン銀行が見えます。このあたりが、
パール・デュエ地区です。

かつてバラックと鉄道倉庫があった一帯ですが、再
開発によって住宅とオフィスと商店を複合したエリア
が誕生しました。ここには、小さなレストランやさま
ざまな屋台が並ぶ中央市場があります。なかでも、チ
ーズや乳製品を揃えたメール・リシャルが面白い。

さらに先には、ショッピング・センター、パール・
デュエがあります。ここは地下鉄、鉄道、バスのター
ミナルでもあり、映画館、カフェ、レストランも揃っ
ています。1階の丸いホールは、スケートリンクです。
マークス&スペンサー、ディズニー・ストア、ラファ
イエット・ストアをはじめ、250もの店舗が入ってい
ます。3階にあるナチュール・エ・デクーヴェルトをの
ぞいてみたら、方位磁石、インディ・ジョーンズ・ス
タイルの帽子などなど、本格的な旅行用品が揃って
いました。

複合文化・産業施設シテ・アンテルナショナル

パール・デュエの隣の駅、プロトーはアールヌーヴォ
ー様式の駅舎が目を引きます。かつての待合室がオー
クシオン・ルームになっており、毎週、クラシックカー、
ワイン、時計、版画、切手、陶磁器、楽器などの
オークションがおこなわれています。

ひとつ残念なのは、駅舎とお揃いのアールヌーヴォ
ー調で親しまれたカフェ、ビュッフェ・ドゥ・ラ・ガ
ールが、数年前、醜悪な前衛カフェに作り替えられて
しまったことです。むしろおすすめは、旧鉄道駅の正

